下山田遺跡４区

2021．3

埼玉県坂戸市教育委員会

序

坂戸市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、市内を流れる越辺川や高麗川をはじめとした豊かな水量を湛える多くの中小河川によって、肥沃な耕地と居住に適した環境が形成されました。その結果、約１万５千年前から続く先人たちの生活の痕跡が大地に刻み込まれ、遺跡として今もなお私たちの足元に眠っています。

今回報告する「下山田遺跡」は、坂戸台地中央部に位置する遺跡で、宅地造成工事に先んじて記録保存措置を講じたものであります。

今回の発掘調査では、平安時代の竪穴建物などが発見されました。特に２号竪穴建物は、底部を欠いた土師器の甕を連結して煙道を構築したカマドが発見され、古代の人々の技術の高さを知る上で貴重な調査成果を得ることができました。また、竪穴建物から出土した鉄は、埼玉県内でも出土事例が少なく、大変重要な発見となりました。

本書が学術研究の基礎資料として、古代から繋がる歴史の解明に広く御活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで事業者をはじめ、多くの関係者の方々に御協力を賜りましたことに深く感謝を申しあげます。

令和３年３月

坂戸市教育委員会
教育長　安齊　敏雄

例　言

1．本書は、埼玉県坂戸市八幡に所在する下山田遺跡４区の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、宅地造成工事に伴う事前の記録保存を目的として、坂戸市教育委員会が国際文化財株式会社の支援を受けて実施した。

3．所在地、発掘調査および整理期間、調査面積、調査担当、調査支援は下記の通りである。

遺 跡 名：下山田遺跡４区

所 在 地：埼玉県坂戸市八幡二丁目地内

調査期間：令和２年９月23日～令和２年10月15日

整理期間：令和２年10月16日～令和３年３月31日

調査面積：約263.5㎡

調査担当：山本良太（坂戸市教育委員会）

調査支援：後藤亮太（国際文化財株式会社）

4．発掘調査および報告書作成にかかる費用は、株式会社一条工務店が負担した。

5．写真撮影は、遺構を後藤、遺物を利屋勉（国際文化財株式会社）が行った。空中写真撮影は、テイケイトレード株式会社に依頼して実施した。

6．本書の執筆は、第１章第１節・第２章を山本が、第１章第２～４節・第３章を後藤が、第４章を加藤恭朗（国際文化財株式会社）が担当し、編集は山本と後藤が行った。

7．出土遺物および実測図・写真等の記録は、坂戸市教育委員会で保管している。

8．発掘調査および整理作業参加者は下記の通りである。

【発掘調査】

荒木敏夫　荻野満幸　竹澤昌子　南谷益二　堀江和秀　柳井武夫

【整理作業】

荻野満幸　根岸真由美　吉田淳子

9．発掘調査および本書の作成にあたり、下記の方々からご教示・ご協力を賜った。（敬称略）

瀧瀬芳之（公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

根本　靖（所沢市教育委員会）

凡　例

1．本書に使用した地図類について、第２図は『新編埼玉県史別編３　自然』中の「第２図　埼玉県の地形区分と名称」をもとに作成した。第３図については国土地理院発行の、1/50,000　地形図『川越北部』、第４図については坂戸市発行の1/2,500の『坂戸市基本図』を使用した。

2．本書で使用する座標値は、世界測地系に基づく。また、挿図中の北方位は、座標北を示す。

3．遺構図中の標高値は、東京湾平均海面(T.P.)を示す。

4．遺構番号は、種別に分けて１から付した。

5．本書における挿図の縮尺は各挿図中に示しているが、原則として以下の通りである。

遺構：竪穴建物・土坑・溝状遺構　1/60

建物内施設（炉・カマド）　1/30

遺物：土師器・須恵器・石製品　1/4

鉄製品　1/2

6．遺構図・遺物図で表示する各種のトーンまたは指示線は、下記の通りである。

遺構：　地山　　火床面　　カマド粘土範囲

7．遺構の種別名称について、遺構図版および遺物観察表では、遺構番号の後ろに、以下のように略して表示している。

竪穴建物・・・竪、　土坑・・・土、　溝状遺構・・・溝、　ピット・・・ピ

8．本文中の遺構規模の計測値のうち、(　)は残存値を示す。

9．遺物図のうち、中心線が一点鎖線の遺物は、反転実測したものを示す。

10．遺物観察表の表記は以下のとおりである。

・法量の単位は全てcm、重量についてはgで記載した。

・(　)は推定値を、〔　〕は残存値を示す。

・計測値のうち、口径と底径は、それぞれの接地面の径を示している。

・色調は『新版標準土色帖』2006年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人色彩研究所色票監修）に即した。

・焼成は「良好」「普通」「不良」の３段階に区分した。

・胎土の含有物については、以下の略称で示した。

海綿骨針・・・針、　石英・・・石、　長石・・・長、　角閃石・・・角、

片岩・・・片、　チャート・・・チ、　黒色粒・・・黒

目　次

例言／凡例
第１章　発掘調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1
　第３節　調査の方法……2
　第４節　基本層序……2
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
　第３節　遺跡の概要……5
第３章　発見された遺構と遺物……7
　第１節　竪穴建物……8
　第２節　土坑……20
　第３節　溝状遺構……22
第４章　まとめ……23
　第１節　下山田遺跡の概要……23
　第２節　２号竪穴建物のカマド……24
写真図版／抄録／奥付

挿図目次

第１図　基本層序…… 2
第２図　埼玉県の地形 …… 3
第３図　周辺の遺跡（1/30,000）　…… 4
第４図　下山田遺跡位置図（1/2,500）…… 6
第５図　遺構配置図（1/200）…… 7
第６図　１号竪穴建物 …… 8
第７図　１号竪穴建物カマド…… 9
第８図　１号竪穴建物出土遺物 …… 10
第９図　２号竪穴建物 …… 12
第10図　２号竪穴建物カマド…… 13
第11図　２号竪穴建物炉…… 14
第12図　２号竪穴建物出土遺物－１ …… 14
第13図　２号竪穴建物出土遺物－２ …… 15
第14図　２号竪穴建物出土遺物－３ …… 16
第15図　３号竪穴建物 …… 18
第16図　３号竪穴建物カマド…… 19
第17図　３号竪穴建物出土遺物 …… 19
第18図　１・２号土坑 …… 20
第19図　３号土坑…… 21
第20図　１号溝状遺構 …… 22
第21図　２号竪穴建物カマド遺物出土図…… 25

挿表目次

第１表　周辺主要遺跡一覧…… 4
第２表　１号竪穴建物出土土器観察表…… 10
第３表　１号竪穴建物出土石製品観察表…… 10
第４表　２号竪穴建物出土土器観察表－１ …… 16
第５表　２号竪穴建物出土土器観察表－２ …… 17
第６表　２号竪穴建物出土鉄製品観察表…… 17
第７表　２号竪穴建物出土石製品観察表…… 17
第８表　３号竪穴建物出土土器観察表…… 19

写真図版目次

図版１　調査区遠景（北西から）
　　調査区全景（北から）
図版２　基本層序（西から）
　　１号竪穴建物（南西から）
　　１号竪穴建物カマド（南西から）
　　１号竪穴建物掘り方（西から）
　　１号竪穴建物カマド掘り方（南西から）
　　２号竪穴建物（南から）
　　２号竪穴建物拡張部（南から）
　　２号竪穴建物出土遺物（南から）
図版３　２号竪穴建物（西から）
　　２号竪穴建物カマド出土遺物（南から）
図版４　２号竪穴建物カマド出土遺物（南から）
　　２号竪穴建物カマド出土遺物（南から）
　　２号竪穴建物カマド出土遺物（南から）
　　２号竪穴建物カマド（南から）
　　２号竪穴建物炉（南から）
　　２号竪穴建物掘り方（南から）
　　２号竪穴建物掘り方（西から）
　　２号竪穴建物カマド掘り方（南から）
図版５　３号竪穴建物（南から）
　　３号竪穴建物カマド（南から）
　　３号竪穴建物掘り方（南から）
　　１号土坑（南から）　１号土坑（北東から）
　　２号土坑（南から）　３号土坑（南から）
　　１号溝状遺構（南から）
図版６　１号竪穴建物出土遺物
　　２号竪穴建物出土遺物－１
図版７　２号竪穴建物出土遺物－２
図版８　２号竪穴建物出土遺物－３

第１章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経緯

令和元年11月、坂戸市八幡二丁目46番11、43、49、50、53、76について坂戸市教育委員会(以下市教委）に埋蔵文化財の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である下山田遺跡(No. 27-079）に該当していることから、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。

令和元年11月13日、土地所有者から当該地の埋蔵文化財の有無を確認するよう依頼を受け、令和元年12月３日から４日にかけて試掘確認調査を実施したところ、申請地の北側を中心に竪穴建物とみられる複数の遺構と須恵器などの遺物を確認、当該地における埋蔵文化財の所在が明らかとなった。

令和２年７月３日、株式会社一条工務店より宅地分譲の造成計画に先立つ事前協議書が提出された。これを受け、試掘調査結果をもとに埋蔵文化財の取り扱いについて市教委と事業者間で数回にわたる協議を行なった。その結果、一部遺構について分譲地内の位置指定道路がかかることから現状保存が不可能と判断され、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

発掘調査の実施にあたり、令和２年９月18日付け坂教社発第867号で文化財保護法第93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出を埼玉県教育委員会（以下県教委）教育長あてへ進達した。これに対し県教委から同年９月18日付け教文資４－984号で指示通知を受けた。文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知は同年９月18日付け坂教社発第869号で県教育長あてへ通知した。

発掘調査の体制については、市教委単独では十分な調査体制を整えることが不可能と判断し、県教委と協議した。その結果、調査支援として民間調査組織を活用することとし、国際文化財株式会社の支援を受けることとなった。令和２年９月４日には株式会社一条工務店と国際文化財株式会社の間で発掘調査にかかる契約が締結され、同年９月18日に株式会社一条工務店、国際文化財株式会社、市教委の間に発掘調査事業に関する三者協定書を取り交わした。

以上の経緯を経て発掘調査は令和２年９月23日より開始し、同年10月15日まで行われた。

第２節　調査の経過

発掘調査は令和２年９月23日から同年10月15日にかけて実施した。発掘調査の経過は概ね以下のとおりである。

９月23日（水）　基準点設置・調査区設定・重機を用いて調査区の表土除去開始。

９月28日（月）・29日（火）　表土除去完了。調査区の精査を行い、竪穴建物３軒、土坑３基、溝状遺構１条を検出。

９月30日（水）　１～３号竪穴建物、３号土坑の掘削開始。

10月１日（木）　重機を用いて２号竪穴建物付近の調査区拡張を実施。１・２号土坑の掘削開始。

10月５日（月）　２号竪穴建物のカマド煙道部遺物出土状況の写真撮影、測量。

10月６日（火）　１～３号竪穴建物床面まで完掘。１～３号土坑、１号溝状遺構完掘。

10月７日（水）　調査区の全景空撮。１～３号竪穴建物掘り方の掘削開始。

10月12日（月）　１～３号竪穴建物掘り方完掘。重機を用いて調査区の埋め戻し開始。

10月15日（木）　調査区の埋め戻しが完了し、全ての発掘作業終了。

第３節　調査の方法

表土は重機を用いて掘削し、その後人力による遺構確認作業を行った。遺構番号は種別毎に１番から番号を付した。

検出した遺構は平面プランの確認後、十文字のベルトを設定または半裁することにより、土層観察を行った。土層は分層し、土層注記・写真撮影・断面図等の記録を作成した後に完掘した。

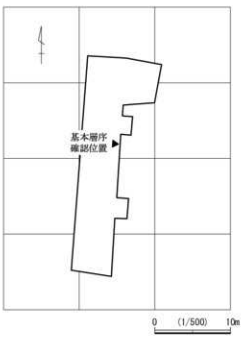
遺構から遺物が出土した場合は、基本的に出土地点を記録して１点ずつ取上げ、大型の遺物などは微細図を作成した。その他ごく小破片の遺物は遺構毎に一括取上げした。これらの記録を作成した後、遺構を完掘し、完掘写真撮影・平面図等の記録を作成した。

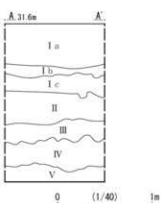
竪穴建物については、土層観察ベルトに沿ってトレンチを設定し、床面下の調査を実施した。竪穴建物で掘り方が確認された場合は、掘り方の調査を行い、写真撮影、平面図等の記録を作成し、調査終了とした。

遺構図面の作成は、トータルステーションを用いた。写真撮影は、35㎜フィルムカメラ（モノクロネガフィルムを使用）、デジタルカメラ（1000万画素以上）を使用した。調査区の全景写真はテイケイトレード株式会社に委託し、ラジコンヘリを用いて撮影した。

第４節　基本層序

基本層序は、調査区北側東壁で記録した。層序はⅠ～Ⅴ層に分層した。Ⅰ層は現代盛土で、ａ～ｃ層に細分した。Ⅱ層は層厚0.22ｍ～0.35ｍの黒褐色土層であり、近代から現代にかけての耕作土である。Ⅲ層は黄褐色土層で、ソフトローム層である。本層上面で遺構を確認した。Ⅳ層は明黄褐色土層であり、ハードローム層である。Ⅴ層はにぶい黄褐色土層で、ハードローム黒色帯にあたる。Ⅳ層、Ⅴ層からは、遺物は出土しなかった。各層の観察内容は以下のとおりである。





基本層序

Ⅰa	黒褐色土	粘性ふつう。しまりなし。砂利・ガラを多く含む。現代盛土。
Ⅰb	灰褐色土	粘性ふつう。しまりなし。ローム粒・ロームブロック（0.5～3㎝大）を少量含む。現代盛土。
Ⅰc	灰褐色土	粘性弱い。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～3㎝大）を多く含む。砂利・ガラを少量含む。現代盛土。
Ⅱ	黒褐色土	粘性弱い。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2㎝大）を少量含む。炭化物を含む。近代の細器出土。近代耕作土。
Ⅲ	黄褐色土	粘性弱い。しまる。ソフトローム。上面にて遺構を確認。
Ⅳ	明黄褐色土	粘性ふつう。しまる。ハードローム。
Ⅴ	にぶい黄褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ハードローム黒色帯。

第１図　基本層序

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

坂戸市は埼玉県のほぼ中央部よりやや南に位置しており、西側には外秩父山地を臨む（第２図）。地形は台地、丘陵、自然堤防、低地に概ね大別されるが、市域の大部分を入間台地が占めている。台地上での標高は約20～50mで、西側の丘陵地帯に向かって漸移的に高くなる。なお、坂戸市西端部の多和目地区には外秩父山地の端部がかかっており、市内最高位で標高113mを測る城山が存在する。

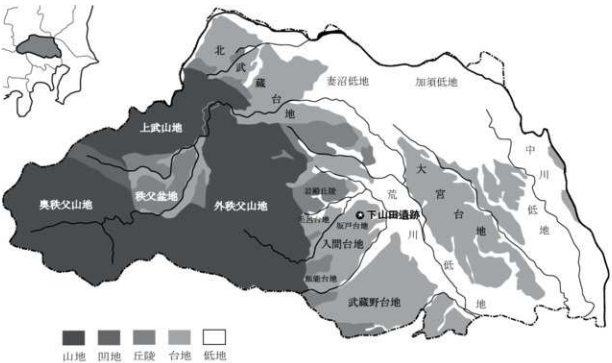
入間台地は荒川水系の入間川、越辺川、高麗川によって形成された扇状地性の台地であり、坂戸台地、毛呂台地、飯能台地の３支台に区分される。坂戸台地は高麗川以東に広がる台地で、飯盛川や谷治川、大谷川などの中小河川によって開析されるが、起伏は少なく比較的平坦な面が広がっている。一方、毛呂台地は高麗川と越辺川に挟まれ、西側には毛呂山丘陵や外秩父山地が存在していることから、坂戸台地に比べ面積は狭小である。台地のほぼ中央には葛川が流れており、東側は馬背状の台地となっている。毛呂台地の南西側には毛呂山丘陵、越辺川の北岸には岩殿丘陵などの丘陵地帯が広がっている。

また、入間台地の縁辺部には、高麗川と越辺川によって形成された肥沃な沖積地が広がっており、現在もなお水田地帯として利用されている。

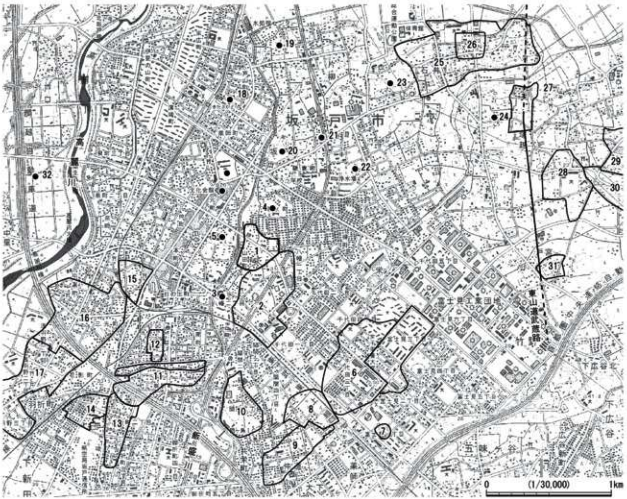
第２節　歴史的環境

ここでは、本書で報告する下山田遺跡４区と関連する奈良・平安時代を中心に周辺遺跡の様相を概観する（第３図）。

古代における坂戸市域はその大部分が入間郡と考えられており、毛呂台地周辺は麻羽郷に比定されている。また、詳細な施行時期は不明確だが、



第２図　埼玉県の地形



第３図　周辺の遺跡（1/30,000）

毛呂台地の北側に広がる越辺川の低地帯には入西条里の推定地が広がっている。なお、入間郡の郡（評）家については霞ヶ関遺跡周辺とするのが有力である。

坂戸台地での時期別の集落分布を見ると、古墳時代は宮ノ前遺跡（19）や勝呂遺跡（25）など台地縁辺部に形成されており、古代になると空閑地であった台地内陸部に突如として集落が形成される傾向が看取される。

高麗川右岸の台地内陸部で中心的な遺跡となる若葉台遺跡（６）では、これまでに竪穴建物約280軒、掘立柱建物約230棟など数多くの遺構が発見されている。集落構成は竪穴建物に比べ、掘立柱建物の比率が高くなっており、四面廂付建物や長大な掘立柱建物（２間×６間）など特徴的な

第１表　周辺主要遺跡一覧

No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	下山田遺跡	17	宮裏遺跡
2	山田遺跡	18	芦山・宝戸ヶ谷遺跡
3	八幡遺跡	19	宮ノ前遺跡
4	清水町遺跡	20	金内山遺跡
5	仲町遺跡	21	相撲場遺跡
6	若葉台遺跡	22	大智寺遺跡
7	富士見一丁目遺跡	23	新町遺跡
8	池ノ台遺跡	24	道場遺跡
9	仲道柴山遺跡	25	勝呂遺跡
10	鶴ヶ岡遺跡	26	勝呂廃寺
11	一天狗遺跡	27	馬場遺跡
12	砦町遺跡	28	住吉中学校遺跡
13	上山田遺跡	29	林際遺跡
14	羽折遺跡	30	宮町遺跡
15	坂戸神社遺跡	31	町東遺跡
16	花影遺跡	32	下田遺跡

遺構も検出されている。遺物は奈良三彩陶器や青銅製鈴、円面硯などが出土しており、遺跡の性格については多くの評価がある。近年は霊亀二(716)年の高麗郡建郡と密接な関わりがある可能性も指摘されている。

若葉台遺跡の南側には池ノ台遺跡（８）と仲道柴山遺跡（９）があり、行政界によって区分されるが本来は同一の遺跡と考えられる。両遺跡の西側にある鶴ヶ岡遺跡(10)も含め、遺構の分布は周辺にある同時期の遺跡に比べ散漫な傾向にある。

富士見一丁目遺跡（７）は、県事業団によって発掘調査が行われ、竪穴建物14軒、掘立柱建物33棟が検出されており、「大田大部」と刻書された紡錘車の出土などが特筆される。

若葉台遺跡の約１km西側には山田遺跡（２）、下山田遺跡（１）がある。山田遺跡は若葉台遺跡と同様に８世紀から成立し、「片牧」墨書銘須恵器や奈良三彩陶器の火舎などが出土している。下山田遺跡は山田遺跡から続く集落の外縁部北側にあたり、遺構の密度は薄いが、小鍛冶の工房とみられる竪穴建物などが検出されている。

飯盛川左岸では、一天狗遺跡(11)を中心として緑町遺跡(12)、上山田遺跡(13)、羽折遺跡(14)などの集落が形成される。一天狗遺跡では、水滴や帯金具、漆紙文書、多数の墨書土器が出土しており、集落内に識字層が存在したことが想定されると共に、官人や豪族との関係性が強い集落であると考えられる。また、羽折遺跡では奈良三彩陶器の托が出土しており、緑町遺跡では、胴部に焼成後穿孔のあるほぼ完形の須恵器大甕が出土している。

高麗川低地帯を東側に臨む台地上には坂戸神社遺跡(15)、花影遺跡(16)、宮裏遺跡(17)が存在する。宮裏遺跡と花影遺跡の東側では遺構の密度が薄く、花影遺跡の北西側から坂戸神社遺跡を中心に集落が展開している。遺構の分布状況をみると、掘立柱建物と竪穴建物数軒で構成される小規模な建物群が点在する傾向にある。坂戸神社遺跡ではほぼ完形の鉄製紡錘車をはじめ鉄鏃、刀子など数多くの鉄製品が出土している。

若葉台遺跡の東側約２kmの地点では、東山道武蔵路が南北に走行しており、町東遺跡(31)と馬場遺跡(27)において側溝をもつ道路状遺構が発見されている。また、東山道武蔵路周辺には住吉中学校遺跡(28)、林際遺跡(29)、宮町遺跡(30)などが存在する。石製、鉄製の権やコップ形須恵器など度量衡関連遺物が多数出土していることから「市」の存在が指摘されている。これらの遺跡群も若葉台遺跡周辺同様に８世紀以降突如として形成されており、８世紀の高麗郡建郡前後に、坂戸台地周辺が歴史的な転換期を迎えたことを物語っている。

第３節　遺跡の概要

下山田遺跡は、坂戸台地の中央よりやや北側に位置しており、遺跡の西側には飯盛川が南北方向に流れている。標高は28～31ｍを測り、西側に向かって緩やかに傾斜するも、ほぼ平坦な地形といえる。

調査事例をみると、県事業団、隣接遺跡とまたがっている事例も含め、これまでに５回の発掘調査が実施されている。

以下各調査区について概観する。

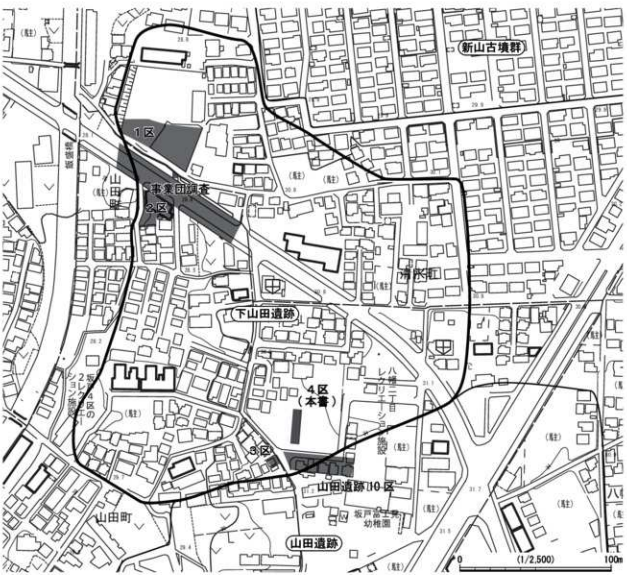
本遺跡における最初の本格的な調査は、平成２年に県道新川越坂戸毛呂山線の建設に先立って実施された県事業団による発掘調査である。調査区は遺跡北側の飯盛川へ向かう緩斜面に位置しており、縄文時代前期の諸磯C式段階の竪穴建物２軒と、縄文時代早期から前期にかけてのファイヤーピット９基などが発見された。県事業団の調査地点の北側に隣接している１区においても、縄文時

代早期から前期にかけてのファイヤーピット９基、集石２基などが検出された。県事業団調査区の南側に隣接している２区では、縄文時代の明確な遺構は発見されていないものの、当該期の遺物包含層が検出されており、土器片や石器が出土している。

３区は遺跡の南側に位置しており、平安時代の竪穴建物３軒が発見された。特筆すべき点として２号竪穴建物の床面付近から複数の鉄製品と金床石とみられる礫１点が出土したことがあげられ、小鍛冶の作業場としての性格を持っていた可能性も考えられる。

山田遺跡10区は隣接する山田遺跡と下山田遺跡にまたがるように調査を実施しており、竪穴建物３軒が検出された。このうち１軒については鉄滓と炭化物が多量に出土しており、建物の平面プランが長方形を呈していることから、３区の２号竪穴建物とともに小鍛冶の工房として機能していたことが想定されている。

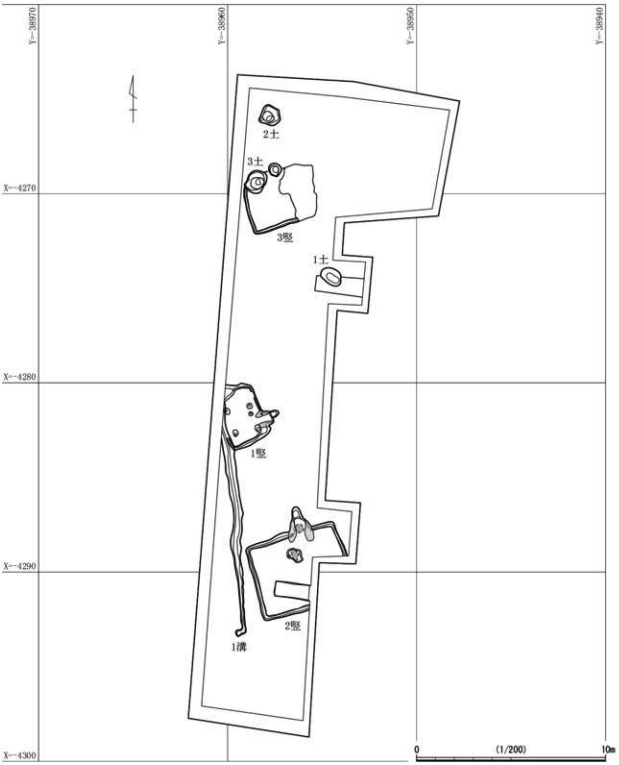
上記の調査成果に基づき下山田遺跡の遺構分布状況を想定するならば、遺跡の北東側緩斜面を中心に縄文時代早期から前期の遺構群が存在し、中央部から南側の平坦面には平安時代の集落域が展開していることが想定されよう。



第４図　下山田遺跡位置図（1/2,500）

第３章　発見された遺構と遺物

検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴建物３軒、土坑１基と、近世以降と推定される土坑２基、溝状遺構１条である。



第５図　遺構配置図（1/200）

第１節　竪穴建物

１号竪穴建物（第６～８図　図版２・６）

位　置：調査区中央部西。建物北西側は調査区域外へ延びる。

重　複：１号溝状遺構に切られる。

形　態：平面形は隅丸方形を呈する。

規　模：長軸3.02m×短軸(2.29)m×深さ0.31m

主　軸：N-67°-E

覆　土：レンズ状に堆積する。残存する覆土は、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。

周　溝：西側を除きほぼ全周する。幅0.08m～0.14m

貯蔵穴：なし

柱　穴：１～５号ピットを床面から検出した。５基とも掘り方面よりも深い。ピットの配置から１～３・５号ピットが主柱穴と考えられる。

床　面：顕著な硬化範囲は認められないが、全体が均質な硬さであった。

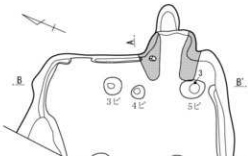
掘り方：建物の床全体に及び、底面は平坦。にぶい黄褐色土層（10層）を貼る。床面からの深さ0.11m。

カマド

位　置：建物東壁南寄りに１基

規　模：長軸1.36m×短軸0.83m×深さ0.27m

天井部：焼土層である６・７層の暗赤褐色土層



１号竪穴建物

1	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。焼土粒・炭化物を少量含む。
2	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。焼土粒を少量含む。
3	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。炭化物を少量含む。
4	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（0.5cm大）・焼土粒を少量含む。
5	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（1cm大）を少量含む。
6	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（2～3cm大）を含む。
7	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（2～3cm大）を少量含む。
8	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒を多く含む。ローム土・焼土粒を少量含む。
9	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ローム土を含む。
10	にぶい黄褐色土	粘性弱い。しまる。焼土粒を少量含む。掘り方。

１号竪穴建物　ピット

No.	長径	短径	深さ
1	36	30	33
2	35	27	36
3	29	29	45
4	23	22	34
5	40	30	35

１号竪穴建物P1

1　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（1～2cm大）を含む。

2　暗褐色土　粘性ふつう。しまる。ロームブロック（0.5～1cm大）を含む。

１号竪穴建物P2

1　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒・ローム土を含む。

2　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。

１号竪穴建物P3

1　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（1cm大）を少量含む。

2　暗褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。

１号竪穴建物P4

1　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（2～3cm大）を少量含む。

2　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。

3　暗褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～3cm大）を含む。

１号竪穴建物P5

1　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（0.5cm大）を多く含む。

2　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～3cm大）を多く含む。

3　黒褐色土　粘性ふつう。しまる。ローム粒・ローム土を含む。

0　(1/60)　2m

第６図　１号竪穴建物

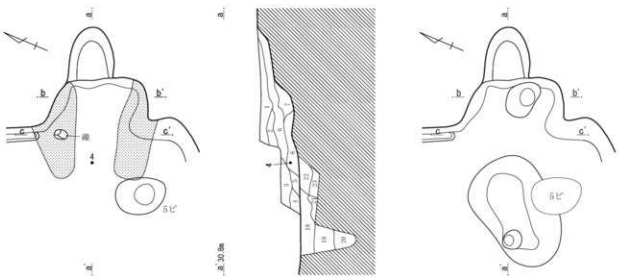
が天井部の崩落土と考えられる。

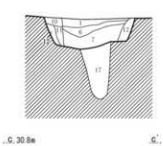
袖　部：13～16層の粘土層を袖部と捉えた。左袖より構築材に使用していたと推測される長楕円形を呈す礫（チャート）が出土している。両袖の粘土範囲から、焚口部の幅は0.39mと推定される。

火床面：明確に赤変した火床面は確認されなかったが、18層と22層の上面が火床面に当たるとみられる。

煙道部：建物壁面より長さ0.75m、幅0.83mを測る。壁から方形に掘り出し途中に段を設けてさらに長楕円形に先端部が延びていた。

掘り方：焚口部から建物の内側に延びるように楕円形の平面形を呈する掘り方が確認された。一部、柱穴状に深く掘り込まれ、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土と黒褐色土で埋められてい





１号竪穴建物カマド

1	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。粘土ブロック（1～4cm大）を少量含む。
2	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
3	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～3cm大）・焼土粒を含む。
4	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～1cm大）を含む。
5	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム土・粘土をブロック状に含む。
6	暗赤褐色土	粘性ふつう。しまる。焼土粒・焼土ブロック（0.5～1cm大）を多く含む。ローム粒・粘土ブロック（0.5～1cm大）を含む。焼土層。
7	暗赤褐色土	粘性弱い。しまる。ローム粒・焼土粒・焼土ブロック（0.5～1cm大）を含む。焼土層。
8	黒褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒・粘土・焼土ブロック（1～3cm大）を含む。
9	黒褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒を含む。
10	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（1cm大）・焼土粒を含む。
11	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（1cm大）を含む。
12	にぶい黄褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ロームブロック（3cm大）・焼土粒を含む。
13	暗褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・粘土・焼土粒を少量含む。焼
14	にぶい褐色土	粘性ふつう。ややしまる。粘土層。ローム粒を少量含む。焼。
15	にぶい褐色土	粘性ふつう。しまる。粘土層。ローム粒・焼土粒を含む。焼。
16	にぶい褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム土・粘土粒主体。焼。
17	黒褐色土	粘性弱い。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～4cm大）を含む。掘り方。
18	暗褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒を多く含む。掘り方。
19	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（0.5cm大）を多く含む。掘り方。
20	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～3cm大）を多く含む。掘り方。
21	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム土を含む。掘り方。
22	暗褐色土	粘性ふつう。しまる。ロームブロック（0.5～1cm大）・ローム土を含む。掘り方。
23	暗褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・ロームブロック（1cm大）を含む。掘り方。

0　(1/30)　1m

第７図　１号竪穴建物カマド

た。床面からの深さは0.45m を測る。また、煙道部中央に不整形の柱穴状の掘り方が確認された。覆土はローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土で、被熱を受けた状況が見受けられないため、使用前に埋められたことが推定される。

所見

カマドの覆土は焼土粒・炭化物を含む土層が少ない。また、６・７層は焼土層と捉えたが、天井部の崩落土である可能性も考えられる。

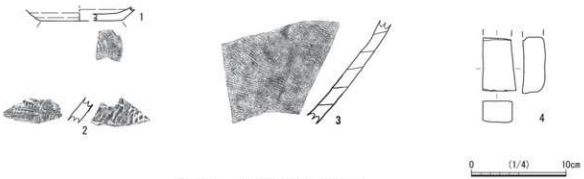
袖部と焚口部は竪穴建物の使用時に近い状況で残存していると見られるが、天井部は崩落したものと考えられる。

出土遺物

出土量は少なく、カマド手前の覆土中より凝灰岩製砥石（４）、５号ピットの底面近くより南比企産須恵器甕の胴部片（３）、床下より南比企産須恵器坏（１）、東金子産須恵器甕の胴部片（２）が出土している。

時期

出土遺物や遺構形態より、奈良時代（８世紀前半～中葉）と考えられる。



第８図　１号竪穴建物出土遺物

第２表　１号竪穴建物出土土器観察表

（ ）は推定、〔 〕は残存高

番号	種別	出土位置	計測値（cm）	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 坏	床下	**口　径**：　－ **内底径**：（9.6） **底　径**：（8.6） **器　高**：［1.5］ **最大径**：　－	**外面**：ロクロナデ、底部ヘラケズリ **内面**：ロクロナデ	**胎　土**：石、長、針、チ **焼　成**：良好 **色　調**：灰 **残存度**：15%	南比企産
2	須恵器 甕	床下	**口　径**：　－ **底　径**：　－ **器　高**：［2.3］ **最大径**：　－	**外面**：平行タタキ **内面**：同心円当て具痕	**胎　土**：石、長、チ、黒 **焼　成**：不良 **色　調**：灰白 **残存度**：破片	東金子産
3	須恵器 甕	５ピ	**口　径**：　－ **底　径**：　－ **器　高**：［10.6］ **最大径**：　－	**外面**：平行タタキ **内面**：ナデ（方向不明）	**胎　土**：石、長、針、チ **焼　成**：普通 **色　調**：灰 **残存度**：破片	南比企産

第３表　１号竪穴建物出土石製品観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存度	備考
4	砥石	凝灰岩	カマド	［5.9］	3.5	2.3	74.3	65%	

２号竪穴建物（第９～14図　図版２～４・６～８）

位　置：調査区南部東。建物南東側は調査区域外へ延びる。

重　複：なし。

形　態：平面形は隅丸方形を呈する。南壁寄りに、幅0.81mの長方形の攪乱が床面下まで達していた。

規　模：長軸5.07m×短軸4.31m×深さ0.32m

主　軸：N-17°-W

覆　土：中央は水平に堆積し、壁際はレンズ状堆積を呈する。建物の大半を覆う１・２・４層はローム粒と焼土粒を少量含む層である。壁際に堆積する３・５・６層はローム粒とロームブロックを含んでいる。

周　溝：調査区域外へ延びる南東側を除き全周する。幅0.15m～0.35m

貯蔵穴：なし。

柱　穴：なし。

床　面：顕著な硬化範囲は認められなかった。北西隅近くの床面は、壁際が最も高く竪穴の内側に向かって緩やかに傾斜していた。

掘り方：底面は凹凸が認められ、北東隅が楕円形の土坑状に窪む。いずれも、にぶい褐色土層（８層）で埋められていた。

炉

位　置：建物中央部北壁寄りに位置する。

規　模：長軸0.8m×短軸0.76m×深さ0.18m

形　態：平面形は不整形、断面形は逆台形を呈する。覆土は２層に分層し、明褐色土層（２層）は覆土と判断したが、地山が被熱を受けた結果変質したものである可能性がある。

カマド

位　置：建物北壁東寄りに１基。

規　模：長軸1.88m×短軸1.22m×深さ0.43m

天井部：粘土ブロック・焼土粒を含む５層が天井部崩落土と考えられる。５層の下に堆積した６層と７層は焼土粒を多く含み、焼土層として堆積したものであると考えられる。

袖　部：10～12層の粘土層により構築していたと考えられる。被熱による明確な変色は認められなかったが、12層には多量の焼土粒が含まれていた。側壁は垂直に立ち上がり、貼られた粘土が焼けて焼土化して赤色に変色していた（９層）。焚口部の幅は0.45mと推定される。

火床面：カマド中央部に被熱を受け、赤色化した面（13層）が確認された。範囲は長軸0.44m×短軸0.41mを測る。

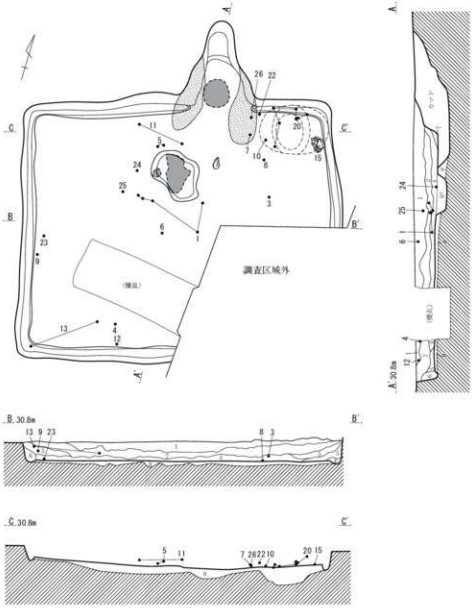
煙道部：建物壁面より長さ1.26m、幅1.22mを測る。火床面より奥の位置から煙道部の先端にかけて、土師器甕を入れ子状に組み合わせて煙道を構築していた。

掘り方：焚口部手前から煙道部の途中までの範囲で確認された。平面形は不整形を呈し、底面は比較的平坦に掘り込まれていた。ロームブロックを主体とする14層と15層で埋められていた。

所見

遺構検出の段階で、カマド右袖部が調査区域外に延びることが確認されたため、東壁の拡張を実施した。柱穴は検出されなかったものの、周溝は南東側を除き全周し、カマド袖下にも巡る。床下で検出された北東部の楕円形の窪みは、貯蔵穴として使用された可能性も考えられるが断言はできない。

カマドは煙道部中央から先端に掛けて、胴部下半から底部が欠損した土師器甕が煙道部の傾斜に

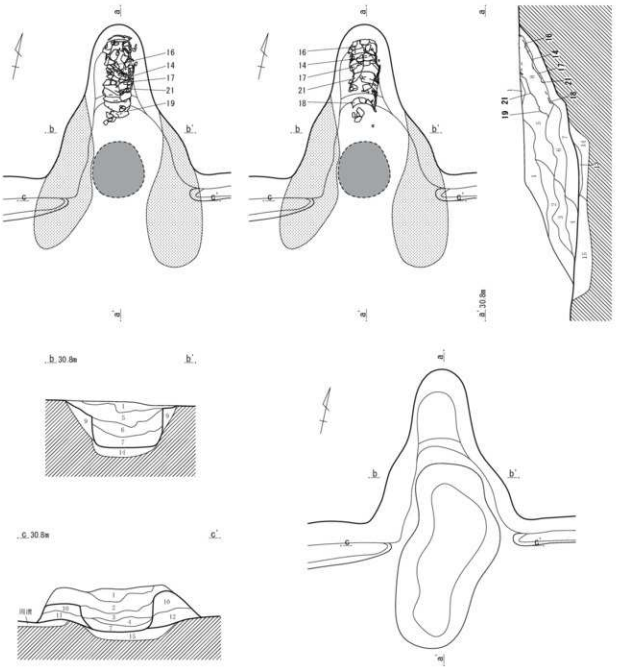


２号竪穴建物

1	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・焼土粒を少量含む。
2	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。マーブル状の土層にローム粒・焼土粒を少量含む。
3	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を含む。
4	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・焼土粒を少量含む。2層と同質。
5	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を含む。
6	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を含む。
7	暗褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒・ロームブロック・粘土粒を含む。カマドからの流出土。
8	にぶい褐色土	粘性やや弱い。しまる。炭化物を少量含む。掘り方。

0　(1/60)　2m

第９図　２号竪穴建物



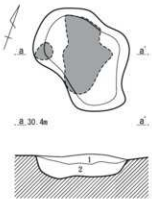
２号竪穴建物カマド

1	黒褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・焼土粒を含む。
2	にぶい黄褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～3cm大）・焼土粒を含む。
3	暗褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒・ロームブロック（1～2cm大）・焼土粒を少量含む。
4	暗褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・焼土粒を少量含む。
5	黒褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・粘土ブロック（0.3～1cm大）・焼土粒を多く含む。
6	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。焼土粒を多く含む。
7	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。焼土粒を多く含む。
8	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。粘土ブロック（0.5～2cm大）・焼土粒を多く含む。土器中の覆土。
9	赤褐色土	粘性なし。しまる。焼土ブロック（0.5cm～3cm大）を主体とする。粘土が赤変した層。
10	褐色土	粘性ふつう。しまる。粘土を主体とする。焼土粒を少量含む。柚。
11	暗褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム土を主体とする。ロームブロック（1～2cm大）を含む。柚。
12	暗褐色土	粘性ふつう。しまる。ローム粒・焼土粒を多く含む。柚。
13	赤褐色土	粘性弱い。しまる。火床面。赤変している。
14	明褐色土	粘性なし。ややしまる。ロームブロック（3～5cm大）を主体とする。掘り方。
15	暗褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム土を主体とする。ロームブロック（1～3cm大）を多く含む。焼土粒を少量含む。掘り方。

0　(1/30)　1m

第10図　２号竪穴建物カマド

沿って入れ子状に重ねて設置されていた。また、煙道部の土器と右袖の外側から出土した破片との接合例が２例あった。こうした接合状況から、カマドを修復した結果と推測される。左袖前に構築された炉との関係も注視する必要がある。



２号竪穴建物炉
1　赤褐色土　粘性弱い、ややしまる。ローム土が赤変している。上面は火床面。
2　明褐色土　粘性弱い、しまる。ロームブロックを主体とする。

0　(1/30)　1m

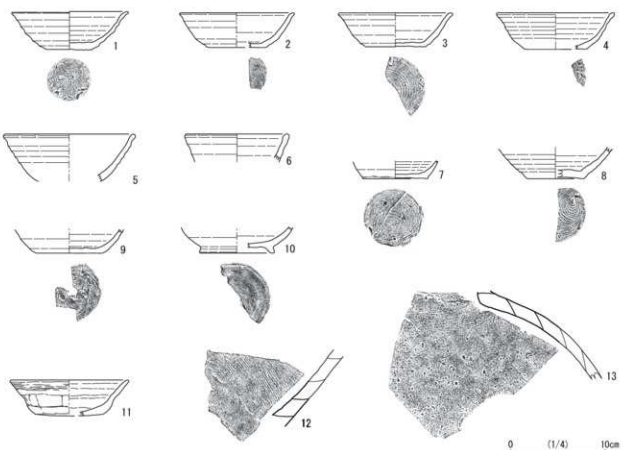
第11図　２号竪穴建物炉

出土遺物

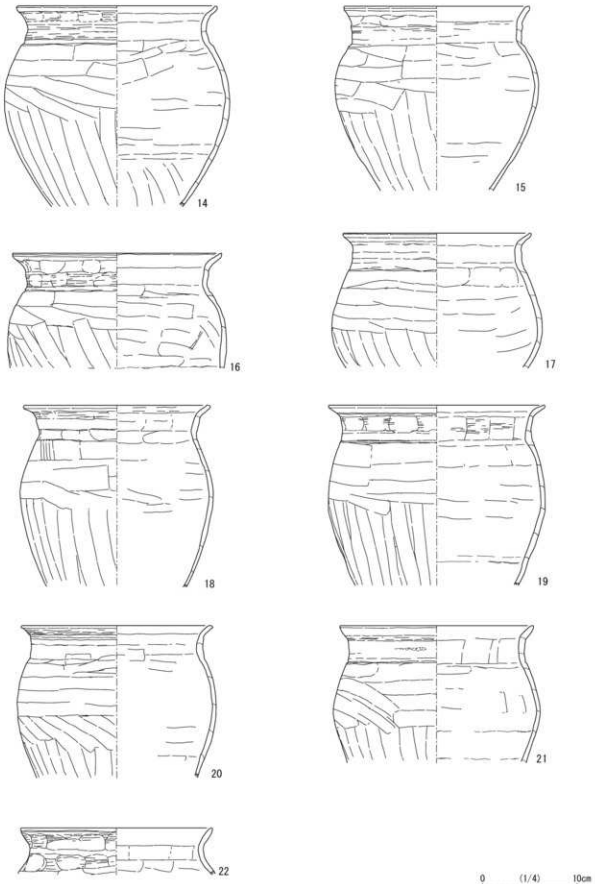
他の遺構に比べ出土量は多く、特にカマド右袖部及びその周辺、カマド煙道部に集中している。建物覆土では土師器坏（11）、東金子産須恵器坏・埦（１・６・９・10）、南比企産須恵器坏・埦（３～５）、鉄製鋏（23）、刀子（24）などが出土している。カマド右袖およびその周辺では、武蔵型土師器甕（15・20・22）、軽石製砥石（26）などが出土し、煙道部では武蔵型土師器甕（14・16～19・21）が入れ子状に重なった状態で出土している。

時期

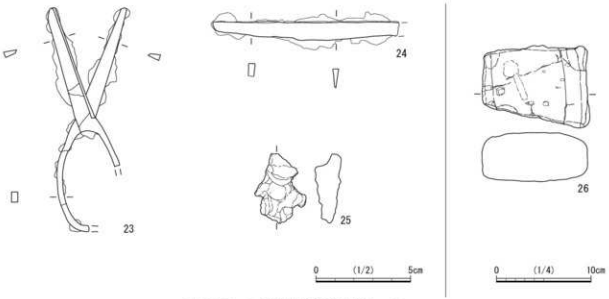
カマドや覆土から出土した須恵器・土師器から、平安時代（９世紀後半～末葉）と考えられる。



第12図　２号竪穴建物出土遺物－１



第13図　２号竪穴建物出土遺物－２



第14図　２号竪穴建物出土遺物－３

第４表　２号竪穴建物出土土器観察表－１

（ ）は推定、〔 〕は残存高

番号	種別	出土位置	計測値（cm）	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 坏	覆土下層	口　径：(12.1) 内底径：4.5 底　径：4.7 器　高：4.0 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：長、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：70%	東金子座
2	須恵器 坏	床下	口　径：(12.2) 内底径：(4.6) 底　径：(6.4) 器　高：3.6 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ、針、黒 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：25%	東金子座
3	須恵器 坏	覆土下層	口　径：(12.0) 内底径：(5.6) 底　径：(6.0) 器　高：3.6 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ、針 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：35%	南比企座
4	須恵器 坏	覆土	口　径：(12.4) 内底径：(5.8) 底　径：(6.6) 器　高：3.9 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、針、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：15%	南比企座
5	須恵器 埦	覆土下層	口　径：(14.0) 底　径：－ 器　高：(5.0) 最大径：－	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ、針 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：35%	南比企座
6	須恵器 坏	覆土上層	口　径：(16.6) 底　径：－ 器　高：[3.0] 最大径：－	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：10%	東金子座
7	須恵器 坏	カマド袖	口　径：－ 内底径：5.6 底　径：6.0 器　高：[1.9] 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ、黒 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：40%	東金子座
8	須恵器 坏	床	口　径：－ 内底径：(5.0) 底　径：(6.0) 器　高：[3.4] 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：25%	東金子座
9	須恵器 埦	覆土	口　径：－ 内底径：(5.2) 底　径：(7.0) 器　高：[3.7] 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：30%	東金子座

第５表　２号竪穴建物出土土器観察表－２

番号	種別	出土位置	計測値（cm）	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
10	須恵器 坏	床	口　径：－ 内底径：（6.8） 底　径：（8.0） 器　高：［2.7］ 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り、高台貼付け 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：普通 色　調：灰白 残存度：30%	東金子産
11	土師器 坏	覆土下層	口　径：（12.4） 底　径：（7.2） 器　高：3.8 最大径：－	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、指頭圧痕、底部ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：長、チ、片 焼　成：良好 色　調：赤褐 残存度：40%	南武蔵型の技法が認められるが胎土は在地。
12	須恵器 甕	覆土	口　径：－ 底　径：－ 器　高：［8.1］ 最大径：－	外面：平行タタキ、ヨコナデ 内面：タタキ、ヨコナデ	胎　土：石、長、針 焼　成：普通 色　調：灰 残存度：破片	南比企産
13	須恵器 甕	覆土	口　径：－ 底　径：－ 器　高：［9.4］ 最大径：－	外面：自然釉、平行タタキ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：破片	東金子産
14	土師器 甕	カマド	口　径：21.2 底　径：－ 器　高：［21.4］ 最大径：（23.9）	外面：口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、胴部ヘラケズリ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコナデ、ナナメナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：褐 残存度：40%	武蔵型
15	土師器 甕	床	口　径：（19.8） 底　径：－ 器　高：［19.7］ 最大径：（21.6）	特徴：コの字口縁 外面：口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、胴部ヨコナデ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角 焼　成：普通 色　調：褐 残存度：40%	武蔵型
16	土師器 甕	カマド	口　径：（22.2） 底　径：－ 器　高：［12.2］ 最大径：－	外面：口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：にぶい赤褐 残存度：30%	武蔵型
17	土師器 甕	カマド	口　径：（20.0） 底　径：－ 器　高：［14.2］ 最大径：－	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、チ 焼　成：普通 色　調：明褐 残存度：35%	武蔵型
18	土師器 甕	カマド	口　径：19.8 底　径：－ 器　高：［19.3］ 最大径：（20.5）	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：褐 残存度：40%	武蔵型
19	土師器 甕	カマド	口　径：（22.8） 底　径：－ 器　高：［19.3］ 最大径：（23.0）	外面：口縁部ヨコナデ、指頭圧痕、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：明褐 残存度：30%	武蔵型
20	土師器 甕	覆土下層 床	口　径：20.0 底　径：－ 器　高：［16.3］ 最大径：（21.0）	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヨコケズリ、ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：明赤褐 残存度：30%	武蔵型
21	土師器 甕	カマド	口　径：（20.4） 底　径：－ 器　高：［14.6］ 最大径：（22.0）	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角 焼　成：普通 色　調：赤褐 残存度：25%	武蔵型
22	土師器 甕	覆土下層	口　径：（20.2） 底　径：－ 器　高：［5.0］ 最大径：－	外面：ヨコナデ、指頭圧痕 内面：ヨコナデ	胎　土：石、長、角、チ 焼　成：普通 色　調：明褐 残存度：25%	武蔵型

第６表　２号竪穴建物出土鉄製品観察表

番号	種別	器種	出土位置	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	孔径（cm）	重量（g）	残存度	備考
23	鉄製品	鉄	床	11.8	0.8	0.3	－	13.5	80%	刃部長6.3cm 未接合、未処理の状態で実測を行なった。
24	鉄製品	刀子	床	［9.9］	1.0	0.3	－	8.4	70%	未接合、未処理の状態で実測を行なった。
25	鉄滓	－	覆土上層	3.7	2.8	1.4	－	11.4	不明	

第７表　２号竪穴建物出土石製品観察表

番号	器種	石材	出土位置	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	残存度	備考
26	紡石	軽石	カマド袖	［8.6］	11.0	5.1	247.3	60%	

３号竪穴建物（第15～17図　図版５）

位　置：調査区北部。

重　複：３号土坑に切られる。

形　態：平面形は方形を呈するとみられるが、カマドから東側と覆土上部は攪乱を受けていたため、全体の形状は不明。

規　模：長軸(3.96)m×短軸(3.03)m×深さ0.12m

主　軸：N-15°-W

覆　土：ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を含む暗褐色土を主体とする。建物は３層に、カマドは４層に分けられた。

周　溝：西壁から南壁に沿って残存する。幅0.13m～0.24m

貯蔵穴：なし。

柱　穴：なし。

床　面：部分的に攪乱の影響を受け、顕著な硬化範囲は認められなかった

掘り方：底面には凹凸が認められ、中央部がやや窪む。にぶい黄褐色土（４層）を貼る。床面からの深さ0.09m。

カマド

位　置：建物北壁東寄りに１基確認された。

規　模：長軸0.71m×短軸0.66m×深さ0.16m攪乱の影響で、カマドの火床面から煙道部の一部のみ確認した。

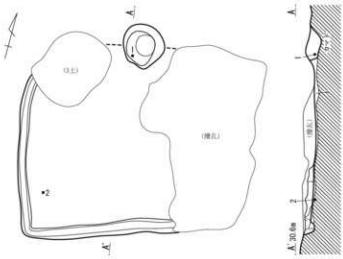
天井部：確認できなかった。

袖　部：確認できなかった。

火床面：確認できなかった。

煙道部：建物壁面より長さ0.34m、幅0.66mを測る。

掘り方：カマドの掘り上がりの形状はすり鉢状になり、建物の床面より深くなった。火床面は確認されなかったが、覆土に焼土粒を含むことから、カマド掘り方と考えられる。また、中央部に柱穴状の掘り方が確認され、ローム土を主体に埋められていた。床面からの深さは0.29mを測る。



３号竪穴建物

1	黒褐色土	粘性やや弱い、ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を含む。
2	暗褐色土	粘性やや弱い、ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～2cm大）を多く含む。
3	暗褐色土	粘性やや弱い、ややしまる。ローム粒・ロームブロック（0.5～1cm大）・焼土粒を少量含む。
4	にぶい黄褐色土	粘性やや弱い、しまる。ローム土・ロームブロック（1～2cm大）を主体とする。掘り方。

0　(1/60)　2m

第15図　３号竪穴建物

所見

撹乱が全体に残っていたため、建物範囲を確認することが困難で、カマドを含む東側が特に顕著であった。西壁と南壁の一部と、それに伴う周溝とカマド掘り方以外の施設は検出されなかった。

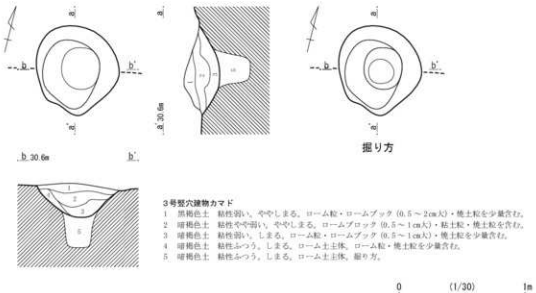
カマドは、粘土層・焼土層も確認されず、近世以降の開発等の撹乱を受け、カマド上部は壊されたものと考えられる。

出土遺物

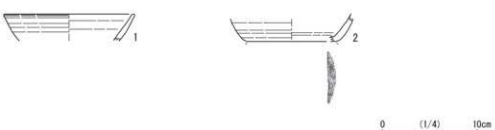
南比企産の須恵器坏片（１・２）が２点出土した。土師器片もごく少量出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期

出土した遺物から、奈良時代（８世紀中葉）と考えられる。



第16図　３号竪穴建物カマド



第17図　３号竪穴建物出土遺物

第８表　３号竪穴建物出土土器観察表

（　）は推定、〔　〕は残存高

番号	種別	出土位置	計測値（cm）	成形・調整・特徴	胎土・焼成・色調・残存度	備考
1	須恵器 坏	カマド	口　径：(13.7) 底　径：－ 器　高：〔2.8〕 最大径：－	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、針、チ 焼　成：普通 色　調：口縁部　灰、体部　明褐 残存度：10%	南比企産
2	須恵器 坏	床下	口　径：－ 内底径：(9.2) 底　径：(9.4) 器　高：〔3.0〕 最大径：－	外面：ロクロナデ、底部ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	胎　土：石、長、針、チ 焼　成：良好 色　調：灰 残存度：10%	南比企産

第２節　土坑

１号土坑（第18図　図版５）

位　置：調査区中央部。

重　複：なし。

形　態：平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。

規　模：長軸1.08m×短軸0.88m×深さ0.97m

長　軸：N－5°－E

遺　物：土師器甕が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時　期：覆土と出土遺物から、奈良・平安時代と考えられる。

所見

本遺構は、調査区中央部東壁際において検出された。そのまま掘削を行ったものの、掘り込みが深く、安全面での危険が想定されたため、調査区の拡張を実施した。

覆土の最下層はロームブロックを多く含む土層が堆積し、中央部は柱を抜き取ったような状態であった。土坑の深度や堆積状況より、柱穴である可能性があるものの、関連する遺構は検出されなかった。

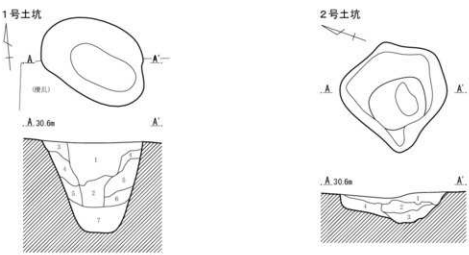
２号土坑（第18図　図版５）

位　置：調査区北部。

重　複：なし。

形　態：平面形は不整形、断面形は逆台形を呈する。

規　模：長軸1.13m×短軸1.13m×深さ0.31m



１号土坑

1	暗褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（3～5cm大）を含む。
2	黒褐色土	粘性ふつう。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（3cm大）を含む。
3	暗褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・ローム土を含む。
4	暗褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（2～4cm）を含む。
5	にぶい黄褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム粒を多く含む。ロームブロック（2～3cm大）を含む。
6	暗褐色土	粘性やや弱い。しまる。ローム土を主体とする。ロームブロック（2～3cm大）を含む。
7	明褐色土	粘性ふつう。しまる。ロームブロック（2～10cm大）・ローム土を多く含む。

２号土坑

1	黒褐色土	粘性弱い。しまり弱い。ローム粒を多く含む。ロームブロック（0.5～2cm大）を含む。
2	にぶい黄褐色土	粘性弱い。しまり弱い。ロームブロック（1～4cm大）・ローム土を主体とする。
3	にぶい黄褐色土	粘性弱い。しまりなし。ローム粒・ロームブロック（1～3cm大）を多く含む。
4	暗褐色土	粘性やや弱い。しまりなし。ローム粒を多く含む。ロームブロック（1～3cm大）・黒色土ブロックを含む。

0　(1/40)　1m

第18図　１・２号土坑

長　軸：N−71°−E

遺　物：遺物は出土しなかった。

時　期：近世以降と考えられる。

所見

覆土はロームブロック・ローム粒などを含む土層からなり、いずれもしまりが無い状態であった。

古代の遺構の覆土とは考えられず、近世の農地開発以降に掘られた土坑である。

３号土坑（第19図　図版５）

位　置：調査区北部

重　複：３号竪穴建物を切る。

形　態：平面形は不整形、断面形は有段状を呈する。

規　模：長軸1.21m×短軸1.08m×深さ0.69m

長　軸：N−１°−E

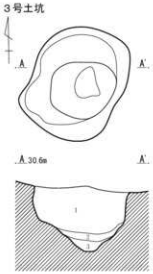
遺　物：遺物は出土しなかった。

時　期：重複関係と周囲の状況から、近世以降と考えられる。

所見

平面形、掘り方ともに不整形を呈し、ローム粒・ローム土を主体とする褐色土（１層）で大半が埋まっていた。

形状と覆土から古代の遺構とは考えられず、近世の農地開発以降に掘られた土坑である。



３号土坑

1	褐色土	粘性弱い。しまりなし。ローム粒・ローム土を主体とする。暗褐色土を含む。
2	黒褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。粗粒子の黒色土を主体とする。
3	にぶい黄褐色土	粘性弱い。しまり弱い。ロームブロック（2～5cm大）を主体とする。

0　(1/40)　1m

第19図　３号土坑

第３節　溝状遺構

１号溝状遺構（第20図　図版５）

位　置：調査区南部。北側は調査区域外へ延びる。

重　複：１号竪穴建物を切る。

形　態：断面形は逆台形を呈する。

規　模：長軸12.48m×短軸0.6m×深さ0.22m

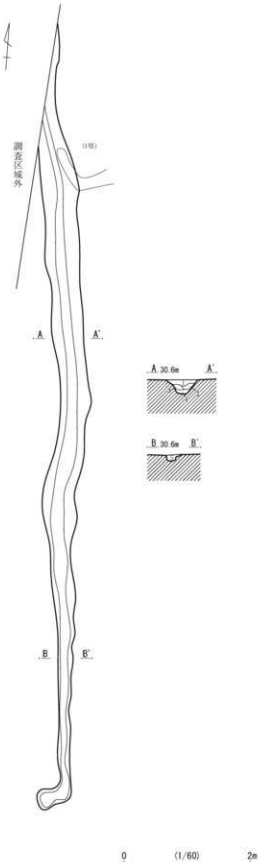
長　軸：N－4°－W

遺　物：土師器甕片・須恵器甕片が出土したが、いずれも小破片で図示できなかった。

時　期：重複関係と周囲の状況から、近世以降と考えられる。

所見

近世の農地開発以降の、畑地の区割り溝と考えられる。



１号溝状遺構

1	黒褐色土	粘性やや弱い。しまりなし。ローム粒を多く含む。炭化物を少量含む。
2	暗褐色土	粘性弱い。しまり弱い。ローム粒を多く含む。
3	暗褐色土	粘性弱い。しまり弱い。ローム粒を多く含む。２層より暗い。
4	黒褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒・ロームブロック（1cm大）を少量含む。
5	黒褐色土	粘性やや弱い。ややしまる。ローム粒を多く含む。炭化物を少量含む。

第20図　１号溝状遺構

第４章　まとめ

第１節　下山田遺跡の概要

１．下山田４区の竪穴建物

今回の調査では３軒の竪穴建物の調査を実施し、各竪穴建物の残存状況や時期などをある程度明らかにできた。ここでは竪穴建物の時期と特徴について改めて考え、下山田遺跡の概要についてふれていきたい。

１号竪穴建物は長軸が3.02mと小型の建物で、時期を決定づける遺物の出土が少なかったが、床下から出土した須恵器坏から８世期前半～中葉とした。竪穴建物の特徴としては、方形から楕円形の２段に掘られたカマドの煙道部に、深さ0.45mの円形の柱穴状の掘り込みを持つことである。

２号竪穴建物は報告したとおりカマドの煙道部に、土師器甕を入れ子状に重ねて煙突状に組み合わせていた。詳細は後述するが、武蔵国でもあまり発見例がないカマドである。比較的多くの遺物も出土しており、鉄製鋏の出土は特筆できよう。竪穴建物の時期は、出土した遺物から９世紀後半～末葉である。

３号竪穴建物は大半が攪乱を受け、建物の半分近くが壊され、残っていた建物とカマドの上部も壊されていた。小片ではあるがカマドと床下から出土した須恵器坏から、竪穴建物の時期は８世紀中葉とした。１号竪穴建物のカマドと形状は異なるが、煙道部に柱穴状の掘り方を持つことが共通し、竪穴建物の時期も近似していると言える。

２号竪穴建物は９世紀後半～末葉の年代が考えられ、これまで調査された下山田遺跡の竪穴建物とほぼ同時期であったが、１・３号竪穴建物は８世紀中葉の年代が与えられた。

２．下山田遺跡の調査

下山田遺跡は埼玉県埋蔵文化財調査事業団と坂戸市教育委員会により、これまでに４次の発掘調査が行われたが、そのうち２地点は縄文時代早期から前期の集落で、奈良・平安時代の遺構は確認されていない。３区と今回の調査区である４区で奈良・平安時代の遺構が発見された。また、下山田遺跡と接している山田遺跡７区と10区で奈良・平安時代の竪穴建物が発見されている。

下山田遺跡３・４区と山田遺跡７・10区で発見された遺構から下山田遺跡を概観するが、いずれも正式な報告書が未刊なので、遺構の時期などはあくまでも参考資料で、正確な年代などは報告書に譲りたい。

山田遺跡７区は下山田遺跡の南側に接した調査区で、攪乱に囲まれたように、竪穴建物１軒を調査した。カマドの煙道部などが壊されていたが、９世紀末葉～10世期初頭の竪穴建物のようである。

山田遺跡10区は今回の調査区に接しており、２軒の竪穴建物と１軒の工房跡が調査された。竪穴建物の年代は８世紀後半～末葉と９世紀後半から末葉で、工房跡は小鍛冶で８世紀後半～末葉の年代であろう。

下山田遺跡３区は３軒の竪穴建物が調査されたが、２軒は大半が調査区域外であった。残り１軒も半分近くが調査区域外であったが、カマドと３本の柱穴、炉の一部などが調査できた。竪穴建物の年代は９世紀後半で、金床石と見られる礫が床面から出土し、この礫から炉周辺の床面に鉄滓の小片が散乱した状態で大量に出土し、製品も発見されているため小鍛冶の工房跡であった可能性が高い。

３．下山田遺跡の特性

下山田遺跡は、坂戸台地中央部に立地し、奈

良・平安時代の集落跡である山田遺跡と接している。周辺に目を転じると古代の中心的集落である若葉台遺跡や鶴ヶ島市に所在する一天狗遺跡・羽折遺跡などが存在し、さらに坂戸市坂戸神社遺跡・花影遺跡などへと続いている（第３図）。これらの遺跡を俯瞰的に概観すると奈良・平安時代の集落が連綿と坂戸台地に展開し、集落の規模からも入間郡北部の中心的地域であったことがうかがえる。

遺跡の立地と年代からも、下山田遺跡は山田遺跡と一体の集落として捉えられよう。山田遺跡の北西端部から広がるように、奈良・平安時代の竪穴建物が確認されており、山田遺跡から途切れることなく下山田遺跡が展開している状況であるが、下山田遺跡は山田遺跡の外縁部に当たり遺構の密度は低くなっているようである。

今回の調査区で８世紀前半～中葉の竪穴建物が発見されたことで、山田遺跡を含めて８世紀前半から広範囲に竪穴建物が展開していたことが確認できた。

また、山田遺跡10区と下山田遺跡３区の調査結果から、小鍛冶が複数個所で営まれていたことが判明し、今回調査した２号竪穴建物から出土した鉄製鋏は集落内の小鍛冶で製作された可能性も否定できない。

山田遺跡では、「片牧」の墨書土器や三彩火舎香炉が出土している。下山田遺跡の遺構を加えて予想すると、牧の経営や仏教施設の設置、小鍛冶などの工房跡、鋏を使う必要があった手工業の運営など様々な集落経営の基盤があった可能性が見いだされる。

第２節　２号竪穴建物のカマド

２号竪穴建物は９世紀後半～末葉の時期が与えられ、カマドの煙道部には土師器甕を組み合わせて煙突状の施設を構築していた。武蔵国入間郡では、カマド袖に補強材として土師器甕を使用する例は散見されるが、煙道部に土師器甕を入れる例は管見にふれない。唯一、府中市武蔵国府関連遺跡1790次M24―SI130のカマドで４個体の土師器甕を入れ子状に重ねて煙道部に設置された調査事例が報告されている。その建物の年代は８世紀中葉と考えられている。

２号竪穴建物のカマドは９世紀後半～末葉の年代で、武蔵国府関連遺跡例よりも新しくなり、甕の設置状況も異なる点が見られる。

武蔵国では非常に珍しいカマド構造ではあるが、多くの課題と問題点が内在している。最後に課題の一端を明らかにしてみたい。

１．カマドの状態

カマドの煙道部は竪穴建物の壁から1.26mほど突き出すように構築され、煙道部が長いカマドであると言える。土師器甕は、火床面から煙道部につながる段差がついた部分から煙道部先端にかけて、煙道部の傾斜に沿って設置されていた。甕は土圧で潰れることなく、使用時の状態を留めていた。甕の中には、焼土粒を多く含んだ粘土ブロックが詰まっていた。

火床面の位置から類推すると、火を焚いた際に煙は設置された甕へスムーズに流入したものと予測される（第10図）。

カマドの左袖近くに炉が設置されていた。一軒の竪穴建物でカマドと炉の両者を備える場合は、もう少し距離を置くのが通常と思われる。

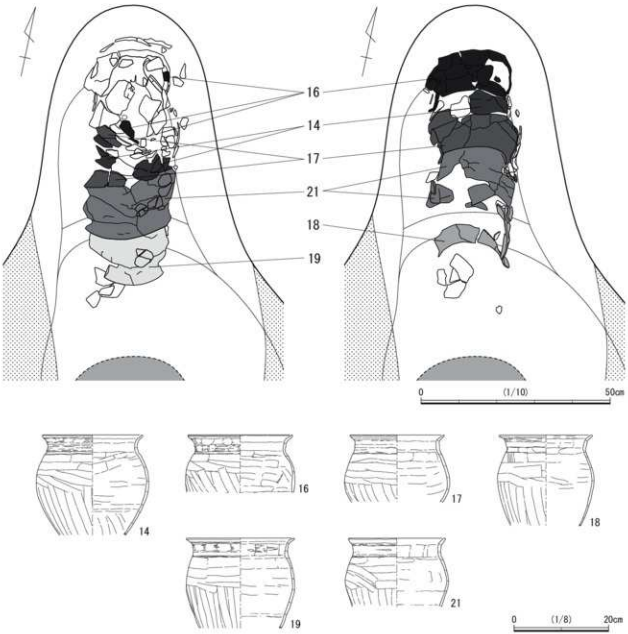
２．土師器甕の設置状態

土師器甕の上部を確認できた状態で、甕は口縁部を下向きにして入れ子状になっていた。３個体分の口縁部が確認できたので、３～４個の甕が順次入れ子状に重なっているものと見られた（第21

図左)。煙道部の先端付近では、甕の破片が重なるように出土し、口縁部片が最も先端部に残っていたので、別個体の甕が煙突状に直立して設置されていた可能性も考えられた。

土器が脆く、個体ごとに取り上げるのが困難なため、上部と下部に分けて土器の取り上げを行ったが、下部の土器が上部の土器と必ずしもつながっていないことが判明した。

第21図は上部の土器(左図)と下部の土器(右図)の接合を示した図である。煙道部下部に位置する18(下部の土器)と19(上部の土器)は他の土器とは接合しなかった。復元した土器は口縁部から胴部中位にかけて、全体の半分程が残っている状態である。次に続く21は口縁部から胴部中位が上部から下部につながっており、2/3程が残存していた。その次に続く、17・14・16は主体が下部に残り、上部の破片とは僅かに接合した程度であった。



第21図　２号竪穴建物カマド遺物出土図

土器の接合状況から、口縁部から胴部上半の甕を単純に入れ子状に重ねたのではなく、口縁部から胴部上半を半分程度残した甕を重ねて煙突状に並べていることが理解できた。

また、16と17にはカマド右袖の外側から出土した破片との接合が見られ、カマドに設置する前に調整して打ち欠いた甕の破片が、カマド近くに残っていたことが考えられる。さらに、この破片と近い位置から出土している第13図15と20は、カマド煙道部に設置された土師器甕と同時期であった。カマド煙道部と竪穴建物から出土した土師器甕は、すべてコの字口縁を呈する武蔵型の甕で９世紀後半に位置づけられる。

３．カマドの使用に関する課題

カマド煙道部に設置された甕に関して、調査経過と整理作業において観察できた結果を列記すると次の通りである。

①接合状況と他の甕の出土状況から、甕は当初からカマドに設置されていたのではない可能性がある。

②破片を組み合わせて煙突状に構築していたにもかかわらず甕がつぶれていなかったのは、意図的に保護したことが考えられる。

③カマドの左袖近くに設置された炉は、カマドと同時使用を目的とした可能性がある。

以上３点のことから考えられることは、本来のカマドの使用目的が変更され、煙道部に土師器甕を煙突状に設置したことである。カマドに使用された甕の破片や同時期の甕が竪穴建物内から出土したことは、竪穴建物を廃棄する直前に変更されたか、廃棄が前提で変更されたのであろう。使用目的の変更を考える上で、炉の存在を考慮することも重要である。さらに、煙突状の甕が潰れることなく良好な状態で残っていたことは、カマドの廃棄を考える上でも示唆的である。

武蔵国では発見例が僅少で、今回もわずか１例だけの調査であったので、土師器甕を使用した煙突の目的を明らかにすることはできなかった。相模国では150に近い調査事例が報告されているようある。時期は少し古くなるが、福島県ではカマドの煙突部に甕を逆位に入れている調査例が報告されているが、底部が残ったままの甕が煙突部に差し込まれている事例も報告されている。遺構に土器を設置する状態は同様でも、目的が異なる場合が十分考えられる。

カマドの使用、廃棄に関してはまだまだ解明されなければならない課題が山積している。今回の調査結果が、課題解明の資料になることを期待したい。

参考文献

1995年『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第151号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
1995年『タタラ山遺跡』福島県文化財調査報告書第316集　福島県教育委員会
2019年『武蔵国府関連遺跡発掘調査報告』（仮称）府中ＤＣ化計画に伴う事前調査　株式会社島田組

調査区遠景（北西から）

調査区全景（北から）

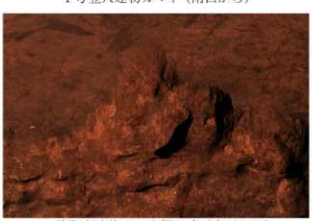
図版 2

基本層序（西から）

1 号竪穴建物（南西から）

1 号竪穴建物カマド（南西から）

1 号竪穴建物掘り方（西から）


1 号竪穴建物カマド掘り方（南西から）

2 号竪穴建物（南から）

2 号竪穴建物拡張部（南から）

2 号竪穴建物出土遺物（南から）

2 号竪穴建物（西から）

2 号竪穴建物カマド出土遺物（南から）

図版 4

2 号竪穴建物カマド出土遺物（南から）

2 号竪穴建物カマド出土遺物（南から）

2 号竪穴建物カマド出土遺物（南から）

2 号竪穴建物カマド（南から）

2 号竪穴建物炉（南から）

2 号竪穴建物掘り方（南から）

2 号竪穴建物掘り方（西から）

2 号竪穴建物カマド掘り方（南から）

3 号竪穴建物（南から）

3 号竪穴建物カマド（南から）

3 号竪穴建物掘り方（南から）

1 号土坑（南から）

1 号土坑（北東から）

2 号土坑（南から）

3 号土坑（南から）

1 号溝状遺構（南から）

図版 6

1号竪穴建物　第8図3

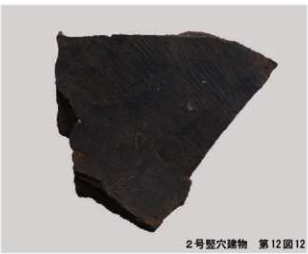
1号竪穴建物　第8図4

2号竪穴建物　第12図1

2号竪穴建物　第12図3

2号竪穴建物　第12図9

2号竪穴建物　第12図11



2号竪穴建物　第12図12

2号竪穴建物　第12図13

2号竪穴建物　第13図14

2号竪穴建物　第13図15

2号竪穴建物　第13図16

2号竪穴建物　第13図17

2号竪穴建物　第13図18

2号竪穴建物　第13図19

図版 8

2号竪穴建物　第13図20

2号竪穴建物　第13図21

2号竪穴建物　第14図23

2号竪穴建物　第14図24

2号竪穴建物　第14図25

2号竪穴建物　第14図26

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しもやまだいせきよんく
書　　名	下山田遺跡４区
副　書　名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	山本良太、後藤亮太、加藤恭朗
編 集 機 関	坂戸市教育委員会
所　在　地	〒350-0292　埼玉県坂戸市千代田一丁目１番１号　TEL　049-283-1331
発 行 年 月 日	2021（令和３）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
下山田遺跡（しもやまだいせき） ４区	坂戸市八幡（さかどしやわた） 二丁目地内	11239	27-079	35° 57′ 38″	139° 24′ 5″	2020.9.23 ～ 2020.10.15	263.5㎡	宅地造成工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
下山田遺跡 ４区	包蔵地 集落跡	奈良・平安時代	竪穴建物　３軒 土　坑　１基	須恵器、土師器、鉄製品、石製品	２号竪穴建物より鉄製の鋏が出土した。
		近世以降	土　坑　２基 溝状遺構　１条		

要　約	下山田遺跡４区は、坂戸台地中央部に立地し、奈良・平安時代の集落跡が中心となる。主な検出遺構は、同時代の竪穴建物３軒であり、このうち、２号竪穴建物からは鉄製鋏が出土し、同建物のカマド煙道部では土師器甕が入れ子状に重なった形で出土した。本遺跡の集落は隣接する山田遺跡と一連であり、既往の関連調査成果と包括すると、鋏を使った手工業や小鍛冶など、集落経営の一端を担っていた可能性がうかがえる。

下山田遺跡４区

令和３年３月31日発行

編　集・発　行　埼玉県坂戸市教育委員会
埼玉県坂戸市千代田一丁目１番１号

印　刷　能登印刷株式会社
石川県金沢市武蔵町７番10号